

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 13

播磨の双塔伽藍からみる「知識」のネットワーク

寺 岡 洋

はじめに

今回、「むくげ通信」のメインが局ってきたのを機会に三つのことを書きます。まず、前号まで12回、2年にわたって書き続けてきた「播磨の古代寺院と造寺・知識集団」の流れをごく簡単に振り返ります。次いで、加古川流域を見直した後に、今号の表題、かねてから宿題のひとつである播磨・加古川流域の双塔伽藍について述べます。

I 前号まで

第1回（2008年11月）は、『出雲国風土記』により、出雲の古代寺院の建立状況でした。出雲国は9郡に11ヶ寺あるが、意宇郡（11郷）4ヶ寺、大原郡（8郷）3ヶ寺と2郡に集中する。寺院の建立者は郡領僧（郡司と郡司候補者）が過半を占めるが、「知識」によるものもみられる。ちなみに、『播磨国風土記』にはなぜか寺院が登場しない。

第2回は、『日本靈異記』に記載される、造寺・知識集団、僧などをみました。取り扱われる年代は仏教伝来から平安時代前半まで。生々しい描写もあって当時の状況をよく窺える仏教説話集。

第3回は、「智識寺・河内六寺と知識集団」。聖武天皇が盧舎那仏（大仏）を造る契機となった智識寺や家原里（邑）の知識集団について紹介。

第4回（2009年5月）はメインで、河内・和泉・大和と古代朝鮮における知識の事例。

『西琳寺文永注記（さいりんじぶんえいちゅうき）』の二種知識、野中寺（やちゅうじ）弥勒菩薩半跏像銘文の「智識百十八人」、「金剛場陀羅尼經 奥書」、「瑜伽師地論（ゆがしじろん）跋語」、行基（ぎょうき）の大野寺土塔（どとう）、法隆寺を維持した知識集団など。

古代朝鮮の知識では、高句麗の仏像銘文、統一新羅初に百濟人（百濟の官位をもつ）が知識により造った碑巖寺・癸酉銘阿彌陀三尊仏碑像など。

5回目からようやく播磨に入り、明石川流域の明

石郡へ。『播磨国風土記』は明石郡を欠くが、『和名抄』では4郷。古代寺院は太寺（たいでら）廃寺のみ。四天王寺の鶴尾（しひ）や飛鳥・奥山廃寺の軒丸瓦を焼いた高丘窯跡とあわせて紹介。

明石川中流域の美嚢郡（みなきのこおり）には古代寺院が知られていない。縮見屯倉（しじみのみやけ）の比定地であり、韓鋤首（からかぬちのおびと）広富（『続日本紀』）という富強な大領（だいりょう 郡司のトップ）がいたのに何故（？）という感がする。

6～8回は加古川中流域の賀毛（賀茂）郡。古代寺院跡が10ヶ所あり、3回続けました。

第6回は播磨で残る唯一の知識写経である、「播磨国賀茂郡既多寺（きたでら・けたでら）大智度論（だいちどろん）奥書」、賀毛郡の人名録（知識候補一覧）の作成、殿原（とのはら）廃寺などを紹介。

7回目は賀毛郡（続）。吸谷（すいたに）廃寺、繁昌（はんじょう）廃寺、野条廃寺、そして瓦の系譜など。とくに、繁昌廃寺で出土する平瓦の「ジグザグ縄叩き」は中河内と共に通する製作技法であり、そのネットワークが注目される（次頁に図あり）。

8回目は、揖鹿（はしか）廃寺、喜田清水廃寺、広渡（こうど）廃寺、新部大寺（しんべおおでら）廃寺、河合廃寺と一挙に。揖鹿廃寺の縁駄の垂木先（たるきさき）瓦は平城京と直結する。紹介できなかった古法華（ふるぼっけ）山は草堂のよう山寺であろうか。

賀毛郡はさまざまなネットワークが交錯する。

ジグザグ縄叩きは、繁昌廃寺・広渡廃寺・新部大寺（しんべおおでら）廃寺・石守（いしもり）廃寺（賀古郡）が関連し、河内につながる。

軒丸瓦の外縁に珠点や平行線（輻線 ふくせん）を交互に配した特徴ある「輻線珠文縁」は、河合廃寺・殿原廃寺・中西廃寺（印南郡）でみられ、但馬の殿岡廃寺（香美町村岡）・立脇廃寺（朝来市）・三宅廃寺（豊岡市）、さらに北山背の北白川廃寺、北野廃寺（葛野秦寺）、広隆寺などにつながる。

瓦の顎面（平瓦下面の先端部）に施文する技法は

山背につながるが、まだ触れていません。

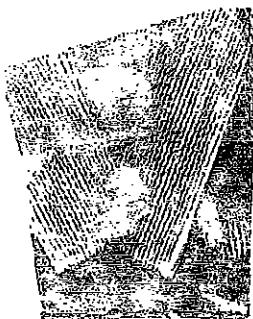
第9回は、加古川下流域の賀古郡と印南郡。シグザグ縞印きの石守廃寺、幅縁珠文縞の中西廃寺があり、野口廃寺では丹波の井原遺跡（丹南町）と同範（どうはん）の軒丸瓦が出土している。

第10回は加古川上流域の託賀（多可 たか）郡。多哥寺（たかでら）廃寺の忍冬蓮華文（にんとうれんげもん）・パルメットの系譜など。播磨でパルメットが見られるのは多哥寺廃寺のみ。忍冬文は河内、あるいは大和とつながる。

第11回は市川中流域の神前（かむさき）郡。瀬口廃寺から出土した奈良時代前半の瓦は、大和興福寺・下野薬師寺と同範で、奈良時代にあっても人脈によるネットワークが機能していたようである。

第12回は市川下流域と夢前川（ゆめさきがわ）流域になる飴磨（しかま）郡の1回目。

以上、東播磨から西播磨へ進んでいます。



広渡廃寺

繁昌廃寺天神山窯跡
播磨・シグザグ縞印き平瓦

II 播磨における古代寺院の状況

播磨における古代寺院跡はおおよそ45ヶ所前後と推算され（別表 今回略）、日本列島の寺院跡を概算で600ヶ所前後とすれば、大和や河内には及ばないが密度の高い地域になる。

奈良時代前半、播磨国の郷数は「律書残篇（りつしょざんぺん）」（律の解説書）に91郷とあり、「播磨国風土記」による里数は明石・赤穂郡を欠くが、「和名抄」で補えばほぼ同数とみなせる。単純平均すれば2里（郷）に1ヶ寺と驚異的な数になる。

里の人口については正確に分からぬが、千人強という説によれば（鎌田元一 1984）、二千人強で寺院を建立・維持したことになる。その二千人の半数近くが15歳以下の未成年だったとされ（今津勝紀 2003）、かなり広範囲な知識を前提としなければ寺院の成立は困難であったであろう。

古代寺院は播磨のなかでも地域・河川流域により疎密があり、①加古川流域の印南（いなみ）・賀古（かこ）・賀毛（かも）・託賀（たか）郡、②市川流域の神前（かむさき）・飴磨（しかま）、③揖保川（いぼがわ）流域の揖保郡、④千種川中流域の讃容（さよ）郡などに多く立地する。前述のように明石川流域は2郡に1ヶ寺と極端に少ない。

このように寺院の分布差が生じる理由について何故なのか分からぬのだが、②・③の市川・揖保川流域については、『播磨国風土記』の記事にみられるように、渡来系氏族が多く集住することと関連すると考えられている。これについては、河内の例からみても異論の余地はないようである。

④の讃容郡については、古代官道である美作道（みまさかみち）の存在と、美作の英田（あいた）郡にも古代寺院が集中することから、古代に最も重要資源であった鉄の生産に関わった集団が寺院建立を進めたのではないかと推測されている（渕哲夫 1992）。鍛冶（鉄生産）は言うまでもなく秦氏・漢氏など渡来系技術集団との関連が深い。

ところで、①の加古川流域に古代寺院がなぜ多く立地するかについては難問でとくに取上げられていないようである。多くの古代寺院が立地するのは地域の歴史的な背景があると考えられることから、その背景について簡単に触れてみたい。

加古川流域の上・中・下流域はそれぞれ異なる背景があったと思われ、今回、上・下流域は簡単にふれる。中流域については双塔伽藍という華麗・装飾的な寺院が集中しており、この双塔伽藍を「知識集団」のネットワークという視点でみてみたい。

III 加古川流域の古代寺院跡 19ヶ所

加古川流域で現在確認されている寺院跡は、上流の託賀郡（4里）4ヶ所、中流の賀毛郡（12里）10ヶ所（古法華山を含む）、下流の賀古・印南郡（各4里）5ヶ所で、計19ヶ所（24里）になる。まず、上流域の託賀郡からみてみたい。

1 託賀（多可）郡 里数4里

多哥寺（たかでら）廃寺	多可町
八坂廃寺	西脇市
野村廃寺（上ノ段（うえのだん）遺跡）	//
明楽寺廃寺（仮称）	//

があり、単純平均すれば1里に1ヶ寺。

託賀郡には蘇我氏の部民(べみん)である宗我部(そがべ)の存在が正倉院文書で確認される(「優婆塞貢進文(うばそくこうしんぶん)」)。そして、曾我井・沢田遺跡(多可町中区曾我井)では、墨書き器「宗我西」「宗我口」(口は不明)等が出土しており、地名の曾我井は宗我部の遺称と考えられている。

また、「日下部(くさかべ)漢目 播磨国多可郡中郷三宅里」と記された木簡(もっかん)が出土することから、ミヤケ(三宅・屯倉・御宅)の存在が推測される。「播磨国多可郡 宅部国口」という木簡の「宅部(やけべ)」もミヤケと関連するであろう。

蘇我氏の主導によるミヤケの設定・運営に宗我部・日下部・宅部などの渡来系氏族が関与したのであろう。ミヤケが核になり7世紀後半の評(こおり)、8世紀初頭には郡が編成されたと考えられる。

託賀郡における古代寺院は、列島に仏教を積極的に受容した蘇我氏の影響を考えられる。

ただ、託賀郡には式内社が6社存在しており、それぞれ氏神を祀る地域集団・氏族が蟠據していた。これら利害の異なる地域集団をまとめるに当たっては、有力な郡司あるいは僧尼が顧主(発願人)となって「知識」により寺院が建立されたものと思われる。式内社のうち、天目一(あめのまひとつ)神社は鍛冶集団が祀る鍛冶神である。

山深い川沿いに立地する寺院は、国営の大寺造立に関わる木材の集積地、杣(そま)の拠点であったのではないかと想像している。

2 賀古郡・印南郡(加古川下流域)里数8里

西条廃寺	加古川市
石守(いしもり)廃寺	//
野口廃寺	//
中西廃寺	//
山角(やまかど)廃寺	//

両郡各4里で計8里、5ヶ寺とやはり密に存在する。

下流域の古代寺院を理解するキーワードは、上宮王家(聖徳太子一族)、山部連(やまべのむらじ)・山直(やまのあたい)、法隆寺の3点セットであろうか。「知識」候補の二人の人物を通じてみてみる。

西条廃寺あるいは野口廃寺の知識・壇越(だんおつ)候補に挙げられる外從七位下・馬養造(うまかいのみゆっこ)人上(印南野臣に改姓)がいるが、先祖の牟射志(むさい)は上宮太子の馬司であった。7世紀

初めころ、牧(まき)の管掌者だったのである。

奈良時代の法隆寺の財産目録(資財帳)を見ると、播磨国に「左豆知乃乎利(さづちのおり)」という法隆寺の施設がある。「乎利」は檻で、牛馬の飼育施設とされる。「左豆知」は、山陽道佐突駅家(さつちのうまや)が置かれていた佐突(姫路市佐土)に比定されており、印南郡になる。「馬司」はこの乎利(檻・牧)と関連する可能性がある。

上宮王家は蘇我氏により抹殺されるが、法隆寺が上宮王家の財産を継承したらしい(鷹森浩幸 2001)。そうであれば、益氣(やけの)ミヤケも上宮王家と関連するかもしれない。法隆寺資財帳に記載される「夜加山」の比定地が益氣里(やけのさと)であり、益氣里は、「御宅(みやけ)」を此の村に造りたまひき。故(やけ)の村といふ」とあって、ミヤケ・ヤケ由来するからである。

ミヤケ比定地の平荘湖ダム周辺には、渡来色濃い池尻古墳群が存在し、首長墳まで継続して形成され郡司層につながる。当然、「知識」候補である。

では、上宮王家はその膨大な家産を播磨でどのように取得したのであろうか。それは、山部連・山直ラインだと考えられている(岸俊男 1988)。山部連はヤマト王権に参画する豪族であり、播磨で実質的に動いたのが山直という國式になる。

もう一人、加古川流域には出雲臣という有力な豪族もいた。稻を水児船瀬(かこのふなせ)に獻じて一挙に外從五位下の官位を得た人物に出雲臣人麿(じんまろ)がいる(『續日本紀』延暦十年(791))。出雲臣は山直と婚姻関係でつながる。在地の有力氏族(豪族)が婚姻により結びつくのは当然の現象であろう。

賀古・印南郡の式内社は1社のみで少ない。



3 賀毛（賀茂）郡 — 加古川中流域

今回のテーマは加古川中流域の賀毛郡になる。賀毛郡は12里からなり、託賀・賀古・印南3郡を合わせた里数と同数で、古代寺院は10ヶ所。賀毛地域は現在の行政区画からみても分かるように大きく東西に二分され、東が加古川本流・東条川流域、西が支流の万願寺川流域になる。

知識写経「既多寺大智度論」

賀毛郡には古代寺院を考える際、希有な資料が残っている。知識・知識集団によって写経され、知識経とも称される「播磨国賀茂郡 既多寺（きたでら・けたでら）大智度論（だいちどろん）奥書」である。

天平六年（734）頃の賀茂郡・神崎郡の61名の氏姓（僧尼を除く）が分かり、15の氏族が知識に結集（知識結）している。写経にあたって主導したのは針間国造（はりまのくにのみやっこ）であろうが、特定の一氏族による写経ではなく、他氏が多く加わっており、既多寺は「氏寺」とは言い難い。

奈良時代、既多寺は少なくとも知識写経に加わった氏族には解放されていたであろう。従って、氏寺より間口の広い「知識寺」の範疇で捉えられる。知識の範囲も隣接する神前郡まで広がる。

創建時の既多寺が知識寺院であったかどうかは不明であるが、賀毛地方の「地域小集団」（栄原永遠男 1999）の構成は大きく変化していないと考えられることから、知識写経と同様に知識により建立されたと推測可能である。

『播磨国風土記』にみる氏族・集団

郡司が建立した寺院、いわゆる「郡寺」という見方もあるが、郡司は特定の氏族が独占するのではなく、記録に残る限りでは、地域有力氏族の持ち回りが一般的であったとされる（須原祥二 1996）。

賀毛郡には他に、既多寺知識経に名前が見えないが、『播磨国風土記』によると大伴連・巨勢部（こせべ）、穗積臣、當麻品渥部君（たぎまのぼむじべのきみ）などヤマト王権を構成する豪族の勢力が扶植されている。当然、大和との交流は存在したであろう。

山直の本拠も賀毛郡である。彼らも古代寺院の「知識」候補である。朝戸君の「朝戸」は王権により編成された百済人の「戸」の可能性さえも指摘されている（岸俊男 1973）。

5世紀末、列島の古代史上最初にして最後の播磨

出自の大王（顯宗・仁賢天皇）が誕生する。この大王の本拠地が賀毛地域・加古川流域であったと想定されている。記紀・風土記すべてに記録される於奚（おけ）・哀奚（わけ）王子である。

倭の五王（讚・珍・濟・興・武）の後に登場した影の薄い二人の大王と、7世紀後半以降の加古川流域の古代寺院建築ラッシュが関係あるかどうか、残念ながら今のところ不明としか言えない。



IV 播磨の双塔伽藍 — 7ヶ寺と集中

1 双塔伽藍の採用について

賀毛郡の古代寺院をみると、双塔の伽藍、それも薬師寺式と呼称される伽藍配置が多いのが特徴である。双塔伽藍はいくつかの様式がみられるが、回廊に囲まれ、金堂の前面（南面）に二つの塔を配置する薬師寺式の伽藍配置は景観として抜きんでる。古代はさらに莊嚴・華麗であったであろう。

白鳳時代、播磨において寺院を建立しようとする時、何を考えなければならないであろう。

まず、寺院をどこに建てるかという選地。一般的に古代寺院は交通路周辺に建てられる。自立つ場所に建立されるのが基本である。ついで、伽藍配置。伽藍配置は金堂と塔の配置が基本で、幾通りも選択の余地がある。費用も重要である。

しかし白鳳時代に、在地集団のみで独自に寺院を建立することは不可能であった。寺院はありとあらゆる種類の最新知識・技術の複合体であり、建立・運営に関する情報・技術等を提供、サポートしてくれる相手が必要である。とりわけ技術者の確保はたいへんであったと想像できる。

その肝心の相手であるが、ようやく律令体制を整備しつつある政権・朝廷では、列島各地の寺院建築ラッシュにとうてい対応できなかつたであつた。国分寺でさえも國は地方に殆ど丸投げであつた。

寺院の建立には様々な余余曲折があつたであつたが、最終的には知識集団のもつネットワークの情報より進められ、その一環として伽藍配置なども決まつたものでないか、と考えられる。

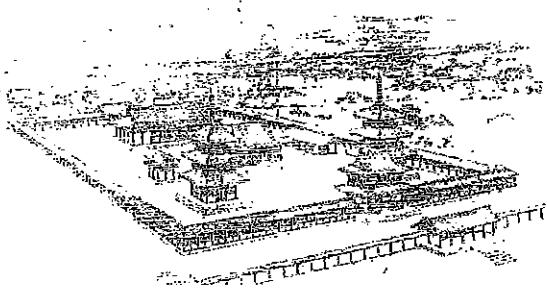
そのネットワークは、播磨において見られる瓦の文様や技法、伽藍配置などから推測すると、まず、播磨各地域間の様々な氏族集団、さらに河内や山背など畿内地域との間に複雑多岐に構築されたようである。そのなかに双塔伽藍に関する情報をもつ相手がいたのであつた。

新羅との交流はどうであろうか。『播磨國風土記』には新羅人の居住や海上交通が記載されている。新羅王子が建立したという伝承をもつ峯相山鶴足寺（みねあいさんけいそくじ）のような寺院も存在し、新羅とのネットワークも否定はできない。

2 賀毛郡所在寺院の伽藍配置

繁昌廃寺（加西市）	薬師寺式
野条廃寺（〃）	薬師寺式？
殿原廃寺（〃）	法隆寺式？
吸谷廃寺（〃）	不明
古法華山（〃）	不明 双塔レリーフ有
広渡廃寺（小野市）	薬師寺式
新部大寺廃寺（〃）	薬師寺式？
河合廃寺（〃）	法隆寺式？
持鹿廃寺（加東市）	法隆寺式
喜田清水廃寺（〃）	不明

賀毛郡で薬師寺式の伽藍配置を採用した寺院は、繁昌（はんじょう）廃寺、野条廃寺、広渡（こうど）廃寺、新部大寺（しんべおおでら）廃寺と4ヶ寺ある。



広渡廃寺 双塔伽藍推定復原図

繁昌廃寺と広渡廃寺はほぼ全面調査された。広渡廃寺は伽藍跡が復原され、史跡公園になっており、公園の一画には伽藍の模型が展示されている。

「？」印は、遺構が確認されておらず推定による。塔心礎のみが残る場合、かつての地表調査や踏査により双塔伽藍とされたものなどを指す。

野条廃寺は創建が平安時代まで下るかも知れない。古法華（ふるぼっけ）山は草堂のような山寺が推測されている。その石仏には双塔のレリーフが描かれ、慶州南山にも見られることから新羅との関連で注目される（報告書 1959年、他）。

播磨の双塔伽藍は賀毛郡以外に、神前郡で2ヶ所、揖保郡で1ヶ所あり、播磨全域では推定も含め7ヶ所が数えられ、河内と並ぶ密集地である。

多田廃寺（姫路市）	塔心礎のみ2個残る
溝口廃寺（〃）	東塔のみ確認（伝聞）
奥山廃寺（たつの市）	金堂両脇に塔（変型）

V 双塔伽藍の特徴 — その地域的偏在

双塔伽藍は薬師寺（奈良西ノ京）、あるいは当麻寺（葛城）の印象が強く、伽藍配置としてはありふれたものだとつい思うが、実際は朝鮮半島の例も含め極めて少ない伽藍配置である。

上原真人氏の論文（上原 2006）から「双塔伽藍一覧」を引用し、その特徴的な在り方と特異性をみてみたい。集成された双塔伽藍は全国37ヶ所。あわせて新羅の状況も鑒見する。

双塔伽藍一覧

大和 10ヶ寺

本薬師寺・薬師寺・比曾寺（現光寺）
地光寺東遺跡・当麻寺・秋篠寺・大安寺
東大寺・法華寺・西大寺

河内 7ヶ寺

百濟寺・正法寺・高宮廃寺・智識寺・葛井寺
善正寺廃寺・田辺廃寺

播磨 7ヶ寺 上記

山城 3ヶ寺

法成寺・尊勝寺・円勝寺

10ヶ国・10ヶ寺 各国それぞれ1ヶ寺のみ

紀伊・丹波・備前・因幡・伯耆・豊前・伊勢
美濃・三河・常陸

新羅の双塔伽藍については田中俊明氏の共著から挙げる(1988年)。「寺々は星のようにちらばり、塔々は雁が飛んで行くように連なっている」

(『三国遺事』)と形容された新羅の寺院のうち、慶州付近のみ。百濟には三塔を備えた益山・弥勒寺が建立されるが、双塔伽藍は現状では確認されない。

四天王寺	木塔	文武王19年(679)
感恩寺	石塔	神文王2年(682)
望德寺	木塔	神文王6年(685)~
仏国寺	石塔	751年~774年~
遠願寺	石塔	8世紀末~9世紀初頭
普門寺		9世紀末に普門寺の僧名あり
千軍洞廃寺	石塔	は統一新羅中期
獐項里寺址	石塔	西塔復元
崇福寺址	崖致遠撰「崇福寺碑」	(896年)

今回、検討の対象から山城国3ヶ寺と10国10ヶ寺を除外したい。山城の場合、双塔伽藍の創建年代が下り、すべて平安時代後期の創建であって時代が大きく異なること、国に1ヶ寺の場合はその特徴を見いだすことが難しいことによる。

山城国と10ヶ国10ヶ寺を除外すると、双塔伽藍を備えた寺院は大和・河内・播磨の3国にのみ集中して立地することが鮮明になる。

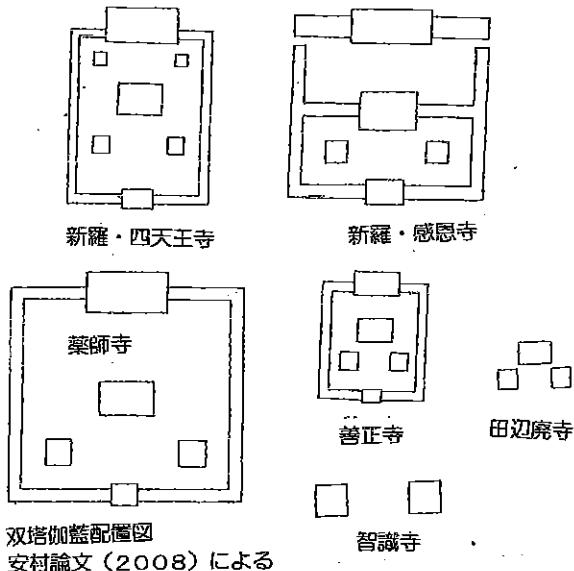
賀毛郡・播磨の双塔伽藍は、大和あるいは河内と強力なネットワークをもった知識集団が建立したのではないかと考えられ、まず、大和の双塔伽藍を簡単にみてみたい。

VI 大和の双塔伽藍について

1 大和の双塔伽藍の特徴

大和での双塔伽藍を備える寺院をみると、際立つて大きな特徴が二つある。一は、本薬師寺・薬師寺から大安寺・東大寺・法華寺・西大寺・秋篠寺など、天皇が発願した官大寺が主流を占めており、奈良時代末まで双塔伽藍を造っている。

二は、大安寺・東大寺建立に際して双塔伽藍の様式が変化し、双塔が回廊の外に建てられる。塔の位置の変化は、寺院の景観はむろん、行われる法会のあり方、教理・仏典解釈においても、それまでの薬師寺式双塔伽藍とは大きく異なるものであることを具体的な形で表現する。



この新たな双塔伽藍の様式は播磨にも河内にも見られない。従って、検討の対象から外れる。

2 薬師寺(藤原京)と新羅の双塔伽藍

大和には何と言っても薬師寺式伽藍配置の本家、本薬師寺と平城薬師寺(現在の薬師寺)がある。本薬師寺は藤原京跡に東西両塔跡、金堂跡などが残り、平城薬師寺はご存知のように世界遺産。

薬師寺式伽藍配置は図のように、中門・金堂・講堂が一直線に並び、中門から延びる回廊が金堂・塔を囲んで講堂に取り付く様式を一般にいうが、地方では変容がみられる。播磨の広渡廃寺・繁昌廃寺の場合は講堂も回廊に囲い込まれる(前頁図)。

薬師寺式伽藍配置は双塔であること、東西両塔と金堂の配置の比率、回廊の縦横の比率などが新羅の感恩寺と共に通しており、伽藍配置の計画上の関連のあることは明らかである、と指摘されている(薬師寺発掘調査報告書 1987年)。

異なる点もあり、最大の相違点は木塔と石塔であることで、塔の規模に合わせて寺院の規模も薬師寺がかなり大きい。

薬師寺(藤原京)の発願は天武九年(680)であるが、いつから造営工事が始まったかは不明で、持統二年(688)頃には少なくとも金堂はできていたらしい。そして、平城京の建設に合わせて現在見る薬師寺が建立されるのであるが、本薬師寺も旧地に残り、往時、新旧二つの薬師寺が併存するという極めて珍しい状況が出現していた。

薬師寺(本薬師寺)は列島における初の本格的都

城である藤原京（新益京 あらましのみやこ）に造られた最新デザインの寺院。都城を華やげ、装飾性豊かな双塔をもつ伽藍を建立したのであろうか。

この双塔伽藍の祖形は多くの指摘があるようによく新羅にあるのであろう。唐との交流は672年～701年までの30年間途絶しており、一方、新羅とは双方の利害が絡み密接であった。

高句麗滅亡（668年）から持統天皇没（696年）までの29年間（ほぼ天武・持統期）に新羅使は25回、遣新羅使は9回往来している。船旅であり、滞在期間が長いので、切れ目なく交流が続いたことになる。新羅はこの時期、四天王寺・望德寺・感恩寺と続けて双塔伽藍の寺刹を建立している。

3 比曾寺・地光寺・当麻寺

比曾寺は著名な寺で、比蘇寺、吉野寺、現光寺などの寺名で登場する。創建の経緯は不明だが、飛鳥時代前半の瓦が出土し、吉野郡最古の寺院になる。双塔の年代は7世紀終末頃とされる（図録 2007）。東西両塔、金堂、講堂の遺構が残る。

地光寺跡は東西に分かれ、臨田神社境内の東遺跡には双塔の礎石が残り、西遺跡にも塔跡が残る。東西の遺跡は時期が併存するらしい。

地光寺の創建瓦は新羅系の鬼面文軒丸瓦を使っていたり珍しい。忍海郡にあり、忍海連（おしみのむらじ）主導の知識寺院であろうか。忍海連は忍海部造が改姓したもので、忍海部造は山尾幸久氏によれば、「播磨の志深（しづみ）の土豪が中央に進出し忍海部造を族称としたもの」（山尾 1983）と指摘され、播磨出自の渡来系豪族になる。

当麻寺（たいまでら）は古代の双塔が現存する唯一の寺である。南面する古代の建物と、東面する後代の建物が重複して建つ。東塔は750年頃の奈良中期、西塔は平安前期に建立されたとされるが、西塔の年代を680年代とする説もある。金堂と両塔の間に距離があり、変型気味な配置になっている。

Ⅶ 河内の双塔伽藍

河内（和泉を含む）の古代寺院は80ヶ寺前後と推定され、渡来系氏族が造営主体となる寺院はその約半数を占めるらしい（上田睦 1997）。

河内の双塔伽藍は、北河内の百濟寺（交野郡）と高宮廃寺・正法寺（讚良郡）、中河内の智識寺（大

県郡）・田辺廃寺（安宿郡）・葛井寺（志紀郡）、善正寺（丹比郡）の7ヶ寺が知られる。百濟・田辺・葛井は渡来系氏族の氏名（うじな）である。

この7ヶ寺に共通する特徴は、すべて渡来系氏族、あるいは渡来系氏族が主導する知識寺院とみなされていることがある。

聖武天皇が盧舎那仏（大仏）を発願する契機となった智識寺（柏原市）から紹介します。

1 智識寺（大平寺廃寺）

智識寺は寺名に智識（知識と同意）が謳われおり、知識による寺院であることをこれほど明確に主張した寺院は智識寺の後にも先にもない。ちなみに、聖武天皇は東大寺を知識により造りたいと宣言しており、智識寺の影響によるらしい。

智識寺の創建に関わった人名・氏族は分からぬが、河内に残る資料から類推すれば（連載第3・4回）、渡来系氏族が主導し造立したのであろう。

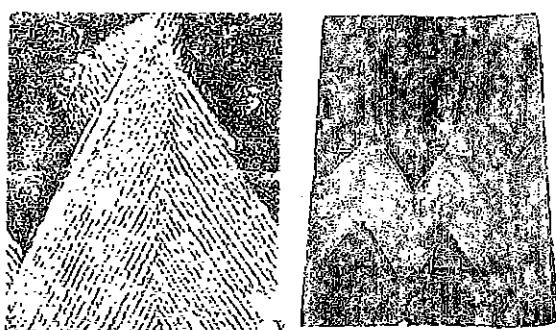
智識寺の双塔（前頁 図）は東塔の一部が調査されたのみで、西塔については江戸時代の「太平寺村絵図」に描かれたガラン石による推定復元。

東塔基壇は二重基壇（一辺20.8m）とされ、幅約2mの下段の基壇を除いても、河内国分寺の塔基壇（約19m）に匹敵し、薬師寺西塔（13.65m）より大きく、七重塔の規模になる。

金堂の遺構は現在まで検出されていないが、聖武天皇が天平十二年（740）に盧舎那仏を礼拝しており、通常、金堂は塔に先行して建立される。

2 河内のシグザグ縄叩き技法

河内のすべて双塔伽藍を紹介する誌面がなくなったので次回にし、播磨との交流を裏付ける平瓦の製作技法をみてみたい。



河内・片山廃寺 東條尾平廃寺
シグザグ縄叩き平瓦

平瓦を屋根に葺いたとき下側になる面(凸面)に前頁のような文様といふか、叩き目(縄目)が見られるものを、菱田哲郎氏はジグザグ縄叩きと呼称された。文様・叩き目だけではなく、布目密度(瓦を作る際、離型材として麻布を使うので、瓦に麻布跡が残る)や側面、端面調整なども河内と播磨で共通性が認められることから、同一工人集団により製作された可能性が高い、と注目される指摘をされた(繁昌廃寺報告書 1987 p54)。

この特異なジグザグ縄叩き技法は、河内六寺の智識寺・山下寺(大県南廃寺)を始め、片山廃寺・東條尾平(ひがしんじょうおひら)廃寺、林廃寺、土師寺、衣縫(いぬい)廃寺、丹比廃寺などで見られる。

同じ技法で作られた平瓦が播磨で見られるのは、ネットワークを通じ寺院造立の一環として、河内の瓦工が派遣されたのであろう。智識寺の瓦の一部を作った工人集団が播磨でも瓦を作ったのである。

3 河内の双塔伽藍寺院の創建年代

智識寺の創建については文献史料がなく、出土した瓦の年代観から、7世紀中葉～後葉と推測されている(安村俊史 2008)。この年代は、薬師寺より早く、文武王19年(679)に創建された新羅四天王寺と同時期か先行することになる。

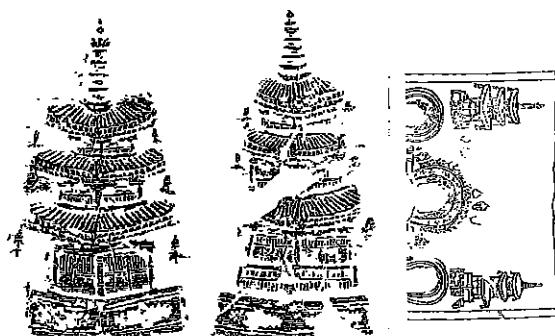
百済系の船氏主導の知識寺院と看做され、双塔伽藍を備える善正寺廃寺も瓦の年代から薬師寺に先行するとされる(上田睦 1997)。ただ両寺共、調査が簡略なのが年代推定の足枷になっている。

四天王寺(慶州)は現在も発掘調査(5次)が続いているが、報告書が刊行されれば創建年代もより明確になると思われるが、智識寺・善正寺が新羅四天王寺に先行する可能性はあるであろうか。

双塔伽藍のデザインは薬師寺で見られるように新羅寺院との関連が強くみられ、また、新羅仏教との深い関係からも、新羅と関係なく河内で独自に創出したとみるのは難しいように思える。

一方、隋・唐において双塔伽藍をもつ寺院はごく稀であるが皆無ではなかったようだ(山本栄吾 1976 岡本敏行 1989)。しかし、中国との直接交流は国際情勢から困難であった。

暫くは、渡来系氏族のネットワークを通じ独自に新羅の最先端寺院の情報を入手した、と考えておくことにする。あるいは、頻繁であった新羅使や遣新羅使からの情報もあり得るかもしれない。



播磨賀毛郡・古法華山石仏レリーフ 双塔伽藍

Ⅲまとめ

まず、加吉川流域に古代寺院が多く建立された歴史的背景として、上流の託賀郡は蘇我氏主導によるミヤケ設置を、下流域の賀古・印南郡は上宮王家・法隆寺・山部連=山直と関係あると考えた。

蘇我氏・上宮王家は両者あいまって仏教を積極的に受容・伝播・定着させた有力豪族・王族である。自らが勢力を持つ地域の寺院建立に援助するという方針を持ち、具体的には影響下の様々なネットワークを通じてサポートしたのであろう。

例えば、託賀郡の多哥寺廃寺の忍冬文軒丸瓦は蘇我氏の指示で鞍部村主(くらつくりのすぐり)が関係したのではないか。法隆寺式軒瓦と法隆寺の庄倉の関連はよく知られた説である。

・双塔伽藍とジグザグ縄叩き

中流域の賀毛郡は寺院位置図(3p.)にみると、狭い範囲に繁昌廃寺・新部大寺廃寺・広渡廃寺・野条廃寺(建立時期は奈良時代後半以降)と、双塔伽藍を備えた寺院が4ヶ寺も集中して建立された列島内でも特異な地域である。

そして、繁昌廃寺・新部大寺廃寺・広渡廃寺の3ヶ寺はジグザグ縄叩き技法がダブっている。播磨以外にこの両方を併せ持つ地域は河内である。

賀毛地域の双塔伽藍は、河内の渡来系氏族・知識集団との交流・ネットワークをもった知識集団が採用した可能性が高い、と考えられる。白鳳時代、賀毛地域3ヶ寺には渡来系氏族を中心とする知識集団の存在が窺えるのではないか。

(注記)

今回、誌面の関係で引用した参考文献について、著者のお名前と発行年のみ本文中に記しました。別紙で参考文献一覧を作っています。